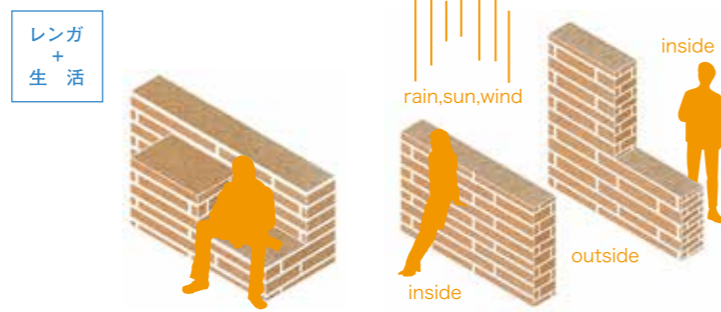
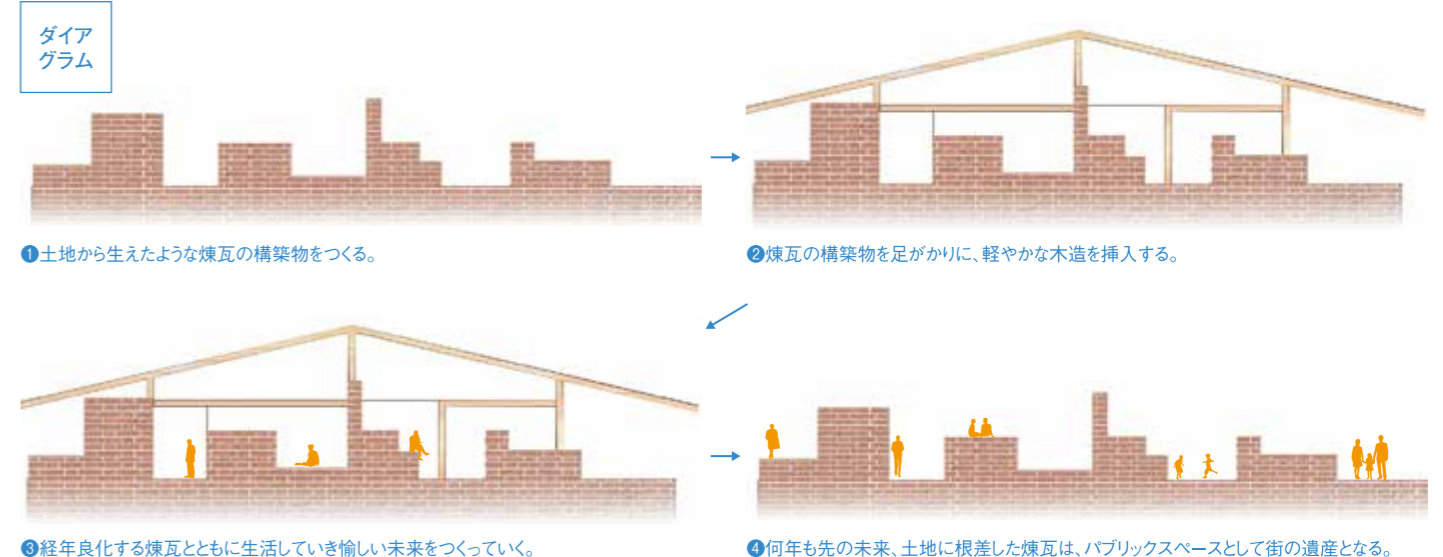


木と鉄筋で補強した煉瓦を用いてこの建築を土地に根付かせる。



椅子や机になる煉瓦の塊。

煉瓦の塊が、内外を曖昧にする。



⑤ 緩やかに繋がる空間。家族が成長するとともに、建築も経年変化していく。  
⑥ 木造と煉瓦造がかみ合う。内部と外部が曖昧になる。  
⑦ パブリックスペースとなった場所。公園のような使われ方をする。

設計コンセプト

敷地は、岡山県備前市三石。この街は煉瓦の街として発展を遂げてきましたが、高度経済成長の終焉や海外製品の台頭に伴って煉瓦製造の生産量は減少し、現在の三石は寂しい街並みとなっています。街にはいたるところにかつての繁栄を偲ばせる煉瓦の遺産が残っています。ここに、過去を尊敬し、未来へ繋がるための住宅を設計します。公園のような大らかなスケールを持つ敷地に、その土地から生えたような、前からそこに存在していた地形のような煉瓦の塊を大小さまざまに点在させます。その地形的な塊を足がかりに、木造を挿入し、木造と煉瓦造の組み合わせによってこの

建築に住宅の機能を持たせます。こうして出来るのは、ずっとそこにあった地形に住まうかのような住宅です。煉瓦は時間をかけて風化し、経年良化しながら土地に根ざし、歴史を宿します。そこに住まう家族は、煉瓦の風合いが変化していく様子とともに生活していきます。何年先もの未来、住む人が居なくなり住宅の機能を失ったこの建築は、住宅の記憶を宿し、土地に馴染んだ煉瓦のパブリックスペースとしてこれから先もこの土地で歴史を宿していきます。

審査委員講評

住宅のために用意されたものではなく、あらかじめあるものを利用しながら住まいを作ることは自分の計画力だけではない、他の力が働き、新鮮なものができる可能性があり、楽しいものです。あらかじめつくられた废墟を出発点とする発想はとても新鮮です。最初にどういった废墟にするかに迷ってしまいますが…。